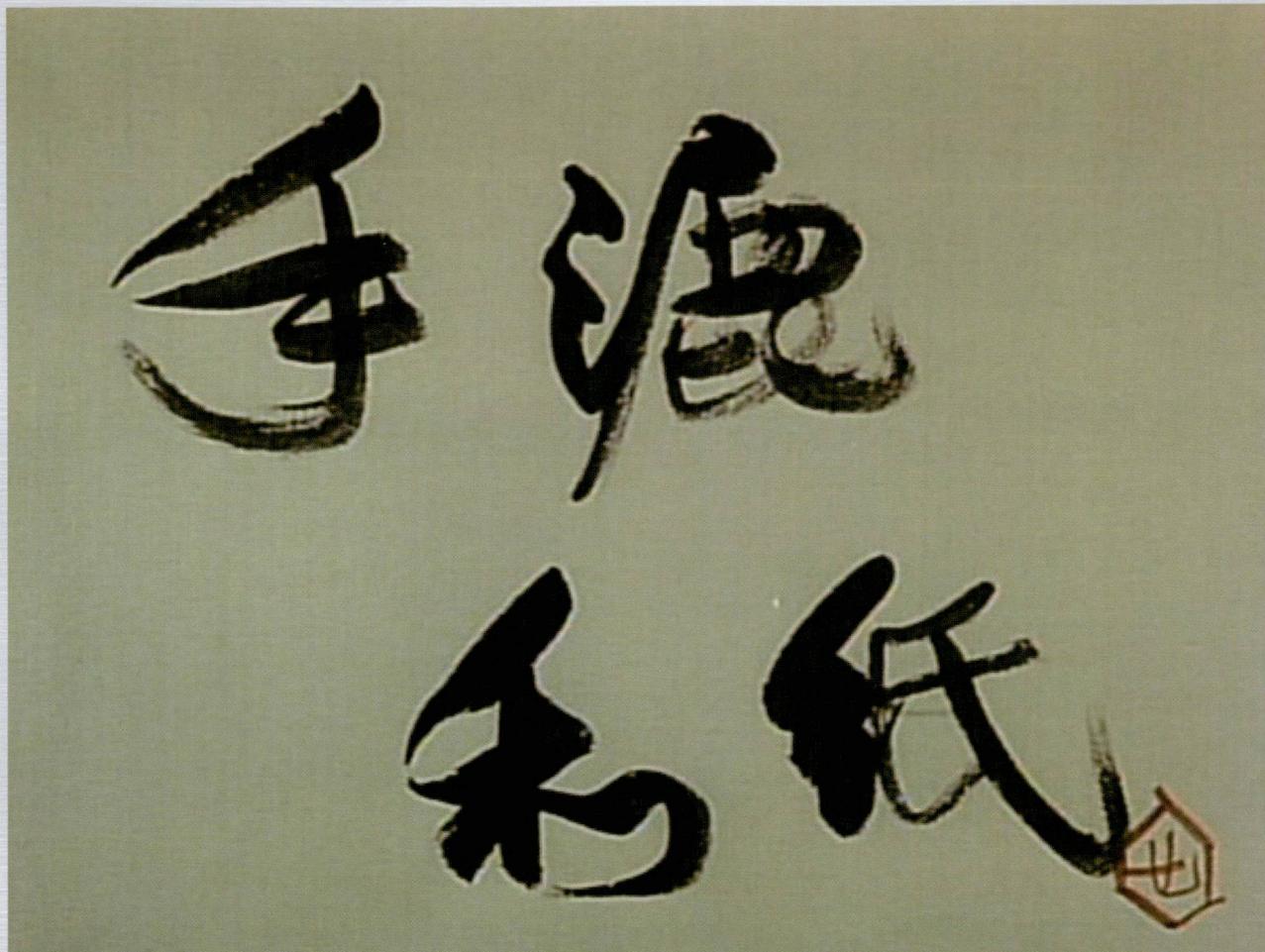


手漉和紙

昭和 49 年度 工芸技術記録映画 35 ミリ・カラー・31 分

企画 文化庁 制作 日経映像



日本の手漉紙である和紙は、コウゾ・ミツマタ・ガンピといった食物の繊維のもつ特質を、できるかぎり自然をそこなわない方法によって取り出し、これをからみ合わせることにより、強くて、丈夫で、美しい紙を作り出す、すぐれた技術を生み出している。

この映画は、そうした伝統和紙の技術を、コウゾ厚紙の代表として重要無形文化財越前奉書の保持者岩野氏と、一方コウゾ薄紙を土佐典具帖紙（記録作製等の措置を講ずべき無形文化財）を代表として浜田幸雄氏宅の2ヶ所の作業場を通じて映画に記録したもので、ともすれば工業生産による近代製紙に圧迫され、製法もくずれつつある現況にあって、伝統の技法を明らかにするとともに、和紙のもつ文化財としての価値を広く認識させる目的をもって製作されたものである。



プロローグ

和紙は真冬に漉く物ほど良質とされている。
千年以上の昔から越前和紙の産地として知られている福井県今立郡今立町の大滝は谷あいの雪深いところにある。



紙すきの水

紙すきにとっては水が第一。練りが十分な働きを示すには軟水でなくてはならない。



釜煮

和紙の原料であるコウゾの繊維が持つ強さ、色彩、光沢がそのまま奉書紙にあらわれる。ソーダ灰にを入れた熱湯の中で煮ることで原料の特色を引き出すことができる。



ちり取り

三人の目を通してコウゾの不良な部分を取り除く。
一見傷と見えなくても、紙に仕上がった時に傷となってあらわれることがある。



打解

洗いあがったコウゾを叩いて、一本一本の繊維にほぐす。



練り

練りは気候や水温に影響される。ねりの発見によって、世界に類のない和紙の製法が生まれた。



揺り

原料を深く組み込み、揺りをかけて繊維同士を縦の方向に絡み合わせる。



土佐典具帖紙

厚紙の奉書紙とは対照的な紙漉きの技術を見せるのが、薄紙の高知県の土佐典具帖紙（とさてんぐじょうし）。



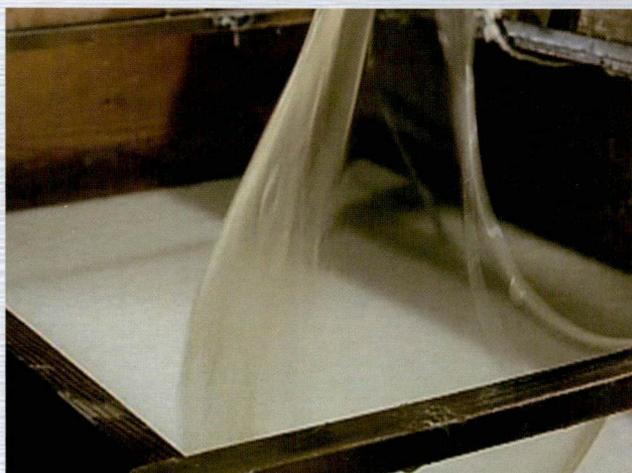
水分を摂る圧搾（あっさく）。

昔ながらの天秤を今も使い、一夜置いて水を切る。
紙を痛めないよう、石の重さを徐々に変えて圧搾する。



乾燥

天日による自然乾燥。白く上品でしかも暖かい肌を持った奉書紙はこうして作られる。



《スタッフ》

制作 佐藤一郎

撮影 浅岡宮吉

音楽 湯浅譲二

録音 時田紀一

(東京テレビセンター)

脚本 北条明直・小谷田亘

撮影助手 大沼均

効果 佐藤日出夫

解説 和田篤

演出 小谷田亘

照明 松田慶次郎

編集 井上正司

タイトル画・題字 芹沢銈介